河海抄

玉葛 胡蝶
初音 蛍

十

へ利/12
1272
10

下

河海抄巻第十

正六位上物語博士源惟良撰

第十七　玉鬘

巻名
恋わたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちを尋来つ
わつらひ月頃をゆめにあかさりし夕かほ
此巻以後末摘花巻と同様也何も竹河まて末摘花
巻は若紫の次なるを横の並なるか也又以ハ夕顔
其につ并也然るに此巻又玉鬘為巻事といへ
其ゆふかほり夕顔の上の事と思ひて宇治の宮
玄夕顔あれは夕顔巻に夕顔にいつく花盛光
はりとてかくして夕顔のうへ露たしてあまてのえ

あかましかりしと侍り
拾遺の秋
世の中にあるましかりける人なきの動く身かなる

特 へ 12 1272 10

此書為紫式部大略同時人之雜説あり
一書に於の考しとゞ了先達之序播物語業平朝臣
在五中將の日記といへる事もあらかたはらいたき事なり
とおもふ事は河原左大臣のすること申しけるを
衛門督業平は元慶元年正月廿八日卒五十六歳
時左大臣は寛平七年八月廿五日薨七十三歳
是不以同時先達の說を引之
かいひそめ書るとよれに安考をおぼしきれ
いろしい潛之恵みいやくるの神之說のいはきおもる哉
潛おといふらし易に潛龍勿用注竜德而隱といふ
いさせん嵐と此嘲草の乞中はおもけるや
たらしあふ寺
あふさきはるふねさを流し孝經曰滿而不溢常持

姫君なしし事と云れ
こゝろきこ　玉鬘君すく
さみのめのとに此跡こゝの大貳なりけるかていきされい
大宰府（オホミコトモチノツカサ）　小貳　掌曰大貳
わかきかたくらかしまゝ行
いぬとこの山のいさいやうへいきとこへかみさきされ
かつ回伏をうや海に
いとしくすきゆくる此米つきにしつくまして泊れ
家こともあくしきこふそうまれぬくと泣くまさふ
うらかなしうるかふを
毛詩曰　紀有芑葉　柏舟子　注曰舟子舟人　義云舟人子　埋垸　白氏文集　六
思ふ人しとしとしのぼりまたらうるけりまつのさこに出
大將　筑前守

こしかたをゆくさきをおもひつゞけてあはれなるにつけてもかなしきことかぎりなし
此二首は武女二人〔姉は浮／弟は光〕手らの詞むかしおぼえて
おもひやるとかいへるもいとゞあはれなり
思ひやるかたにむかしの事を思ひいでゝ
むかし男ありけり
なにがしの守の女にかよひけり
ある日妻の弟のわかれに
武蔵の南海に一の島あり離れて成る時にはけふ見る人の
使ありてなりたちをまいりしに
これよりわかれをかなしみし
業之漢朝古事也孔子在衛聞桓山之鳥生四子羽翼既成将分離悲鳴以相送と云へり是よりてある別を
と号を詩其別離の悲しき事にいふ事也

かねのみさきをすぐともわれはわすれじとす
〔春時の鐘〕筑紫の鐘のみさきは海上ながくいへば人みなつゝしむ所なり
〔一云〕ちはやぶるかねのみさきをすぎぬともわれはわすれじしかのすめ神
出羽の人なりけるにや
仁徳天皇四年始置出羽国史〔出羽任限事〕　仁明天皇兼
和銅元年七月勅出羽国守介以四年可為限但陸奥出
羽大宰府是云以下国始自筑紫不遷至于四五
年云為任限云天平十九年十月辛卯始更遷
天平宝字二年九月丁巳始以百廿日為交替十月
甲子国司以四年為任限〔国史〕宝亀十一年八月庚申
大宰任限増為五年
補任なり
わたちの人とも
秋さらずおこなひ行
年〔年三月六〕〔三八正月九月〕月〔六八六〕斎日也

一　奥云佛説年三長齋殊勝福田功德經云
年三長齋經曰若有善男女等從年三〻齋戒
忽曉諸難等護淨得福利於年齋者
三ヶ月者謂天帝釈爲主領四天下校計衆
生所作善悪於正月廿日向南閻浮提二月起靈
那於三月北鬱禮四月向東弗婆提六天帝以正月五
月九月廻向南州校計衆生作業云々
後撰集　才廿　禄ゟをこゝろよく女禮越れすしら
とぬらりて侍りれいくのつく所らりしらの仁和清和
ゝゝせにたよせてをつくいみりくも玉の?をかきゝめて
一説云星　歳星
年ゝふの人をそいこぬくにいくさうゝいろく
太宰府一員　帥　権　大弐　少弐　大監　二人　少監　二人

監あり大典　少典　大工　史生　おほくのかずの録事時也
いつの件監録事れとき大工監と号す大監者正六
位下少監者従六位上相当也官軍監
軍者有東監者有西
武官也
めくらいケしや　　經廻也
とはらいとさみさらり節れ
若嬗其説者（修逸訓）（文ミ光）　春師席
おつまわく所なりれし節ゟ人のいひまてこそその物いひそれ
けさくいふにくもさりきこえよそひはされ人達
假借人（ナツカヒウストヨメリ）貞觀政要二八曰　氣紫人　新猿楽記　又假相人（日）
遊逸人（ヒヨツ）　所云物語云うはやきに井をおかす
やとれ給りいてともあまりくりてまいろきまうひ
あつりうらむすもりなうしよひひはかひかひ宮は

あをによしならの山とをあやしめる杖ぬれ
いはでも来ぬ手にふれぬと
とはなく
この月いきめくさわり　祖母激
三月春季乃終にて季終月世俗流例にこと
かわよこしつきりてまつたなかつきぬ神代をかくちりぬし
或古老物語云或家姫祖合一男廣継於西府誅
及以大野東人為府兵令攻彼等之時廣継自以
刀切鎖之以異室蹴放府軍成赤縣見之人悉死
去之肥前国松浦郡鏡明神是也　見或説集箇
風土記曰昔者気長足姫尊在此山遊覧国形而勅
祈云天神地祇為我助福便用御鏡安置此不云鏡
山化為石見山中因名曰鏡山

あさかすだの光とこれぬるみえしを肥後国ならん
神々の母もりにつみてかゝる代をこせてねるる事に
出或ありあらんとかるかつまつるかぬ神や守りまつる神
思やこいのふかきをまた事を
またやいまつし花といふみえたり
れくのりは　親と　一万八
いきしをなしつゝ　不生と
むらさきのところにきるれてもりやいりこ海りとまうるをかれ
ゆくらさも見つのゐ渡らしかつく風かすみけるかひかさし
らやうねしゆかすれて
舸　やおら蒙云　古哉文　漢語抄云波紀布弥
高尾舟一云戦士可乗之擢舟也
人このやの刀　自物語云ゆめるしはのせてまつし

いやはるかなつきやうをおもはせ
すまにのといふさ　しつやかねのなくれゆくひとへ
いかさかなくさふすきかいそくゆくやあるへ
ゆうこそあるてせし伊佐奥のけ渚前にさふこつ
あふ所いまもゆてこそゆわいかき浜をりゆり
うしとつくいかさかさふ志の舟まこの中すさとつまゆそのゆ
此舟の国にいとうしる径は玉に川あるとりは南国の
本五神中好顕然にのらきなすさい播にあり俗説には
いさなすさとも人ふとこ　土記云天慶四年六月十日
是日停舟　件淡路木驛至備前史中云賊二艘　結交あく
後御書奉幸人捨舟脱道入京人と
かのあふわさん　かうるゝ川尻
案し此泊名名別不文字哉とて別字書しれ　うる

善相公意見延喜十四年旧重請修復播磨国魚住泊事
右臣伏見山陽西海南海三道舟舶行之程
自檉生泊至韓泊一日行自韓泊至魚住泊一日行自
魚住泊至大輪田泊一日行自大輪田泊至河尻一日
行是皆行基菩薩計程所建立也今公家唯修造韓
泊輪田泊長廃魚住泊　とも
おこたりけ　此住て　らそこ　衛門
こゝろせいりをいすくとそ　はとさらと
いらあさん　市女　商人
みつのくにに海も月のうつらく
如莫鷲之居陸似鳥雀之霞巣　名所集　作者人
ちるきかにやかさ此実をはかりこそつねまつていかり路　古新文　千文作の御

まつはこれ弁おはし候ふなり

筥崎ハ八幡宮 社内宮あるこの由縁あられ仍土記ニ社切官佐

延喜廿一年六月廿一日於託世吾而大門御宣託

筥崎清師 遺ニ記ス 流之兵一乎子七女 女子橋渡子流

吾是八幡乃無文一御子也大菩作之吾穂浪郡大分宮ニ移任後已有三

歳一者竈門宮ハ我伯母ニ御生而年中菩倉府

宿以下国司雑任年来之間賭之背我家馬

已遂済下或乃着笠渡彼御前之御恨甚有恐

二者郡司百姓濫倉賭供給之ニ越冷退出敦日致煩民

間吾同我吾三者放生ハ是海上之事也穂浪宮故

吾我国土鎮護之始所ニ我之恵吾ヲ彼松原地ニ可遷

御之名ッハ筥ノ崎トハ号ナリ

筥崎新宮ニ向新羅国方文礎面書敵国降伏

申ス之ヲ柱文彫梁棟ニ之由柏文ニ安置之以来御示勅

観音木像奉同ニ家早奔穂浪古彫旗幢筥崎

宮也 異記文 大式藤原当勝期氏言上ニ家任宮殿営

之式貞我朝治造立作新宮之宮府儀之流宣旨為御祭

所未發カゝ外賓通接之伏也営まう文彫様畫巻

羅者 延長元年遷御筥崎新宮

かのこゝろのことく

八幡宮五師

貞観八年別当安宗之時以運岐清師 始補文師

安和二年別当貞芳之時以五師 貞善清師 始補

大文師

くりせん人おほかたにあつたなるむねしあさいはぬ

とりうへのはたにこそありけり

縁起云長谷寺泊瀬河浦の豊山峯徳道上人建立す
一面観世音菩薩之利生道場也
神亀元年公家被建立 聖武皇帝 同四年三月廿日供
養 導師行基菩薩 信宗皇帝后馬台夫人 文宗孫玄成太子婚
形のみにくき事を歎給ふ仙人告ていはく
東に向く日本国長谷寺観音に祈請し給ふべし
其の中に一人の貴僧紫雲に乗て東方より来てすゞ
しき水を面に灑とぞ忽に容貌端正に成給ふ
同乾符三年丙申七月十八日彼女と使を辛して明州
の津より出向く十種の宝物を以て海より献れしと
又吉備大臣入唐の時長谷寺観音を信じ祈りて祈請
して野馬台を読べき時異瑞あらはし読だるとぞ
わが身に添ひましてめくく人をかすまへり給へとく

徳道上人長谷寺建立之時故房前公参内助成し
時徳上人任物尾穏放氏繁昌の為に男衆生のためと
祈請し中見縁起に玉ひ給ふ藤氏なれはましてとぞ
かちよりまゐるとてよめる
うつりゆく大将あて更と思ひけて北のいのちに任せなん
海かけてかちよりわたみまゐる
はいりちとなふ所に　椿市　大和名所之
日本紀に海石榴市といふは別所に はいきのつらもついりたれ 又結ひ名花にうら はいきれいりりて
古蹟をもらいしろうし所之
しるされといひさす物をつゝいつらたるとのちまさにあひこふされ
椿の納言枕草子にはいりやましにあまさにあり中侍
くりせたまいかる人のよ次うこふは海中若のは観音
のはけれあるやうに任いかる人のよかり

つれ〴〵として　いちめかさにかゆひさら杖やとく

拾遺集詞云　春物へまかりけるにつけはしきしてゐ

　ける女のもとの野へはゐるるとおもくといひけり

ひすましぬくとも

かちありきいとくるしく　大つかかちのゆくく

　歩行　大軍徒歩　白氏文集

いやしきにいかにも

かいねりまさるなたくしるく

掻練は紅のうときをいふ　かい練りぬりにきぬやてとふ

つきを略りたとんいへれはのとし　此詞不可勝計

ぬしひとへかくとれ　古人文とどめぬれとも可見

枕草子云やせいろくろきうたてのすしめてたれはいとも

おほしてすさまれとぬしもさくいかさいもみてとしく

ねすうきぬきさの方　尚風云同小言とさき　大和国司

大悲者はとくしやさしや

大悲者観音事也　玉鬘の巻にかのいやさしと

類聚国史長云云　五種の家は大悲を子種とす

まつ人の世にあらされ地獄以下の十種神人とくとます

なくさせぬ大悲とくへのねかひをそつへしとく

かつり　賽　白氏文集　白氏

ありのままにしてぬ銀をあるよ

筑前国に海撰造筑前国観世音寺別当　見無

那珂郡楼青瓦文銀あるは駐蹕菩薩家

斉明天皇以来大化年中將幸於外那遊獵

於此御時綿伝同此霊窟三寶

與隆之勝地也　登極以後為果伴御勅白鳳十

年初勅下筑前国建立菩薩院乃至　天平神護二年

相模東大寺ヶ戒壇遷尊當伽藍ヶ出家
みあしかと　　内侍文
からくれなゐのきぬ
藤原頼輔朝臣　　玉葉内侍聲ノ童名之
いろいろのくさはなのひもやいかならむ
上臈のなれてよき人にはいまもかはらぬ
勘文曰　白妙のてまりの前にておはします
(并)いへにかまりのすそ　(姻)
仁位三位御きぬにはのかたてにはかくれて
東京まりとりて(縮遠)
御あまのすすのはなちとうちてあまりのつぎ
みせいうらいのへてまあの枝にそへてみて
られしきせはまちて年へ

いりつさのところにてうちしきませまあまりとし
うりせりなくみとしらぬときおほせあはせへなむれは
おほみよりは秘のつめ御川の御さへのうちにたてまん
かるおもくさきへかはしくおほけなりぬ
わか庭にはれおさのまかれとも慈わかぬ御まにれをさもと
いれよてもと　　　　　　おこ
ふ御へて　　　若女　一日
おさつゆへけやされ秘力おいはまに御へてりたとおもへん
うらけの物語に大ねこ御へてせ給へかしとく
若のきれるのゆかりそおほれ給ひて御へてまるりゆかる
わかまんいふるましてしつりみやり
しつろい勘當のんかり　色もわれ人へふかきやとこゝの
蜻蛉日記に堀川大政大臣のつかはしける文にさしいれあ中れ

いさゝか小すさみをかしたまひしかりけり小
色ごのみの人なりしに
ありともうらみもなくおもへりまへはおほくもみえしはさしと
おほらかなりとて思へはくちをしあはれくまえぬゆゑ
なりまへにはおろかなるものとやまとなすくの人のおもひし
こゝろけむれなをまにまうけの地
天子より庶人にいたるまで警策調度は人の運ぬところ
なかしこいふことなりけりとりてなし　けうとはかの事也
けるは小人のため
わかれさい　野沈　又見沈
礼記曰婦人壁帯麻于房中
東し女は西に居住すへきなれ　注曰房中則西房也天子諸侯有左右房之
ぬものしてあるは

文殿　仙院より摂政太政大臣家にいたるまで在々文書を納所也
いにしへ　只下女といふ　賤市女　商人也
なまめかしたちまて　妃とは后姫といふて　むすめを
とのこをよくいへるてい　擒故也　けるともるなり
このところにいへきんはならしと
その人をすこしうらやみひがみ行
作語物語にしかしおとこ津きなりけり人をもてはにおもは
なくてはいろかなるへし　莫面　吉かな
あしたゞすたゞしくかなしさる
朝饌かのいのちにあれはおはらかなるさまにもうまれあしゝことして
蛙子のんは父母よりすくれつき事と玉を替れ雄力の上手
よそへくいのちゝしく

然れはかの紙へ並てまうつハいろはにほへと寫さうん
髻してすら繪書とは髻の上にならへりしせとくに
万葉には冠纓子を並へ繪を書つとあり
作して見せて人をかゝつ我むしかれしなりけり
まうつかけるは時なくに書きてにゝを書にはゝお時すし
人はさおもひやすらんまうつかほさみふをいてしぬ人て行く
あれとやよてからうらん
古今ほてやかなるらむよ井かくまうら一会おろし風
かのけしきはいきまかりけるにいはい
いきまくいかいりしいつき繪るの風或年はいつさし
とけり倣さ
うらこれもりまいまろものとき
紫来うつかしもらとれけ車とれをまでけり男女紫来し

うらの事なかに行さめきのやすらは晦はみなり
うはいのかくもみれられにもうかめはにこう
ちきいすやかくれすれかへはこのかうしに
宋よ事に紅梅いさねし伝文いてすきなのすこいはま
のとは書めはさかみて
あさけみとこれうふのりん
海浦文　大浪のとはそとかこ
とくれうとよろこひあなりのやとて
うこひあきうやいさいく山川のあさ給をそうふすらとて
そこいあらはうこありこいはをとあさこうとくいうさらあり
玉涯底こ
しかれなりえてふ事をひちかいうめさうち志派らう
さらのこきうつ風ゆかもくあしまやてとり

ちるさしみれおりもれいこそならすまのことは紅葉
う流さ赤ぬなり
らせられあゆきこにあとふひのおりわれいとんくせある
をとうけれくゆ行よけうくられしれゆそゆしいろまそて
黄なるゆへ文れ東流二人参り勘し
西実読三黄家三品親王孫王後源氏及良家子孫爵冠
右着し五郷子孫作成上当官时用黄衣
ゆてぬすらしよあふわわれ
あふらるは昔にらうちあふはすとゆふんなり
又奥ん行を　古格也
おけつはるしたんのゆめなるり　似実付之
こよひれうよ見　古代介読
海上丹写まぬことしるへし

おまつらすま丹せるはよろゆしき
後徳大寺にはま丹写まあらしとあり定家ハなをいと
とし北らしとく古人の君しうりしハ力北らし
しらしとはやとあ字にく
禁しやとあ字二字としまてハ書無くれ三文字と読
つきれ仮令不堪の午後尚雇會遇の趣を詠せんと
く毎夜まと丹れと文字とは書くすすを禁するれ達
生文のく夜毎夜出来りくし
けさらのおりしきいよみふいあるひとのこゆふいつとらしを
やとあ不かりと赤く
任堪之氏
あさ人れすきにいあるゆえありなるわか身はまさこさ死すなる
定を添不可限此一首也て鏡書ありけるへくを
桐代好詠し申れ

紙屋紙草子

かしやみのさうし

こうおすいおういと申せしやまひは、くさのおほうしかい

有五字體 體文漢成式 六拳七病 韓撰式 有四

病後作體 體出 有八病也

こうきすつてをみつさるへしに

韻をとへくきこゝに病とに、避へきよきぬへきよしとこゝ

とりやよ紀ある　古今詞花一ノ韻

第十七　玉醫并一初音

さし月をまつにひかまくうち人まふらひとぬつの寿をよ

いつさらかゆかけしさ死の寒し来

あまもるそらつあすさらまるをねいらひとれ

かきぬへぬうきねのうちしきに

野へこれいわる所にとらむへしらうかき祥れ弟も妻めき紅れ

いきそうはさけるおまへのにいらしめ

ほりえにいまし海しをおすむ人をかねてきりせい

けかつきにも玉し海と　玉璋

けるのおし　棄土浄方し　殿　昇汎亭

いけのかけのとくにかと

四土不二　同居　方便　實報　寂光や

歯固事 見掌中歴

一本 煑塩鮹 六本為一前 押鮎 火干 皆上置鮎串差

一本 鯉 鳥 麻 猪 皆随盛物 串差置上 但貫三

一本 依漬茄蕪 大根

一本 屠蘇白散 窪坏

一本 酒盞 窪坏四口

一本 空盞

一本 鏡 相具鮎 大根

一本 橘

元三御菜 歯固事

内膳自右青瑣門供御歯固具盛青瓷 然而 熱七坏

大根一坏 茄串判二坏 或説三坏 由有不見

押鮎 切盛置以 煑鮎一坏 同切置以 二串

猪完 以雉代之 鹿完一坏 以田鳥代之

以上七坏為内精進物供於第一御臺 魚類供二御臺 或説七鹿完 有勝采

皇女禎子 三条院女三女 陽明門院是也 母中宮妍子 長和三年正月二日 于時二歳

餅鏡御覧 是其例也 栄花物語云 かくてことしはみちとせのけふをかぞへきつれるものいはひとゝもそなはれるに よろづよをちぎりおきつるものゝふのいのちはつきせぬ事をこそおもへ あはれいたう童の戯く

わらはことつきせんと

寿詞 ことほきのことば 言吹 寿 或講 いはひのことば

古事記曰 撃以鼓為伎 コトホキ 十城之座寿 ヤホキ

文選曰 掩咸陽以取雋 ヒコシ

而史三千合人於南殿而蔽調子入日花門列立東庭

踏舞周旋三度列立御前言次奏寿詞平

かねてうつゝもわかずおもひかへしつゝいはひつれ

あるときその山城にてたまはりてうちゆうちかうらをせさせ
世俗諺　覧餅鏡ハ眼福也
ましましたまひしとそ
兼題　兼材手し
うす氷とけゆくいけのくまこに世をふくはみえけむすゝつる
柳似舞腰池如鏡　白氏文集
氷池如破鏡雪如残花　俊頼達寛人名　早春
春の日はけふ池のこゝろは柳のまゆまゆ
あゆ桜のひなからをにちよせいるあけくいろしるを
ごけりをあらひにひかきのゆくえにわたり行つましはまて
此いなとのみへいはゝかにまつひゆあり
十節記云正月子日登岳何傳云正月七日登岳遠
望四方得陰陽静氣除煩悩之術

又云引小松延遐年と　初学記云歳首祝祈松枝男
七女二七
拾遺　三条太政大臣
ゆくすゑも子日の松のためしにはきみかちとせをひかむとそおもふ
倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期
氣味之克調　菅家
本朝事始云天安元年禁中有曲宴　昔者上月
之中也有此事眺望之子日遊今日之宴存之
もけこともひくりこすて　賀茂　檜破子
うつほ物語にねのひしきしけれはよせぬてりとはり
又これ松の枝よりわりこひとつゝあそふ
よ月とまついひまゐらせ蕁ぬまぬせよ
拾遺集曰太后宮に宮内といふ人のわかなさしいる時さい
このゆかりの中よいかゝへてゆまへなる又菓に蕁手

きこえさせ給ひしとおほとかくあるをわいはれすゝめ
（みやま）梅の花なく鶯の声もとうろ林のひまはいかなり紅梅
同集云天人四時不争いふ人不のまへはあるみゆすかは紅梅
の枝りつけくらそら待かりたはなく
（一條禅閤）鶯は文いあつすみすとも鶯れ待ての枝ま手すこれとも
上風流さも無首なれ
はとせぬさまれときこて給ふるは
又ふるはまろ林すりせよ鶯れ音せぬ里いあらしものを
昔れたとよりやそ行る鶯の枝にとまらせてまちきこえんれ
くさしらうあるや
いもせれちきのなり　妹兄（いもせ）　細碎　妻　妹方
いもせとは日本紀のうらく伊奘諾伊奘冊為兄妹
夫婦之行つき関係しいりしとせしもいふ

されは蘭巻にいもうと中ね玉鬘者はいもせむすひきこ
らといふなつかしさのゆかりもあまりにひけるかと
そりつるか婦妹とも志てあつねにつかふまつりけるは実のはて
うとましくおもひけつことに先つこ
一説云いもせとはいもせことゆへこと
兄弟成夫婦事　高津内親王（桓武皇女　嵯峨妃　帰桓武帝）同腹
又仁徳天皇依兎道稚郎子遺言娶一腹の妹女
御を為婦　済海云妹五十丈人為夫妻　漢朝にも同
姓不婚と
えひらつしてゆくゆくは婚へき
日本紀曰　伊奘諾尊授黒鬘　化成蒲陶
このゆへにえひらつとえひらつといふなるし
あけぼのかなれつつかはとかにかうなる子細うみやうに

伊勢物語
いにしへよりありとしもいひやらん世にもありと思ふしら称を
罔云男女はともしく思ひしけるかは伊勢る事は
伊勢物語とよし出てかろ法師みていふにかう
こありけるのはなりて名のるきんとはなれ文花散里臭とり
なれて人をなきけとかりしすいはるや文かりこま藤
いさりとかふ人いふくにもらけるとよとかり世にも
さりと思ひ給ふて立つりけ事也
みのさいにわかり給ぬまさいとてすゝみ給には
玉鬘巻年十二月にわかり給へはいまとすゝむまくすと宝之
かとめすりとこしはそりてさいにしかふりと也
清 きとぬまうしなりすきてさわやかなり也
かのさしきやうされとくしかいしさしきる也に
唐東京錦之唐にて東西安京とありまた内東京也

錦まてんなれとは　欽明天皇御宇に唐東京錦模綱音朝
らしあるなとけふにありそくゆるかしくとれしにかかれると
えひらかまり也
一説薫物の火とりの事也にも栄し普通火桶也
裛衣香方
零陵香 七分　沈香 二分　丁子 二両　蘇合 二両
甘松 二両　藿香 三両　鬱金 一両　麝香 半両
右六種各別搗為散和合唯蘇合以唐以羊接碎
・和国好
浥衣香方 千金羽翼方
沈香　茴香 各一両　丁香　甘松香　藿香
青木香　艾納方　雑古香　薩摂香 各一両
射香 半両　白檀香 三両　零陵香 十両

一流衣比香　射覆見之見延喜式或衣被香
すらりと申へあるうきさ海こ
此ハ上手の御時世よりのすらふいろて久すれそうれ
さかりす　不足　を学ありて或なされます
あらしや花の様子にいまいかく昔の事を此ゆへ由著
問之　宋の時をこ作りくひとと大せり御らん
著る也なく彼のとして其こゆへ其此独てまちこら作ら済
人声を次第しとむるく著れ無へしき定ふらそわれ
こゑまらいそうれいたまともあり　未動
さけのくて以下しあきはゐて
梅の花を第にとくにいつしあ待いとりくてあると著れ有
此とり作つらさますけ在第をさわす
第やきとは昔想よつけてすき海くとうきやうあるなし

をそれある事をはけくらしうろすくてはいつうのこと
好物　集十二　也者　同十六　選利楽園第子中也物　書傳序
由来也物　不在天然為者心則為害　白氏文集八駿圖
世間也物雜留連とこと易銷歇塞北花江南雪　同 眞娘墓
意者不但感其事亦欲懲也物室乱階垂於未来也
陳鴻傳 長恨哥
大鏡に古今撰せられし おり貫之と云ひてしくわかう作り
まつせ作りことにも夜いひて事多く時ある也それよりあやし
きはいしこれとうこけやさきし思やすへしとはり
ゑけるもしかくれいてまきらいてくおもすくし行
此時君とは御政関白の事にていはあ上妻を拾く
あるいてといふ作るまいわり御精あわり様ハ此時君と号す
此九自余とは大饗とかいて中東大乗さ大大臣也

摂政氏長者の饗を設て此関白をもて自余の摂家（セツケ）
饗をいふて先を源氏摂政の也へよ弁家饗とまうしけ
らはるか関白家とはいふて
大饗事　・　正月二日　二宮　中東
関白臨時客　四日左大臣饗　五日内大臣饗　謂母屋饗　大臣位謂庇饗
右漢　朗詠なと
いとめてたく
花のさかりに久しくあはせ
　たれ　吹風の花のたよりにさそはれて心そうつる人のとはかる
　右推　三風の花のさかりにちらはれに春のさかりもなみたなりけり
あはれさかりの比さそかし
朝家御　弁少将このともからいてゐる
秋篠安人　右京人又不見　右中弁近衛少将延ノ廿三年正月
　辛丑任参議　中少将お
　　　　　　　被任之

此殿　催馬楽　二段
このとのはむへもむへもとみけりさきくさのあはれさきくさのはれ
さきくさのみつはよつはのなかにとのつくりせりやとのつくりせりや
ゆきくさをすゑつきてつき
さきくさに説々あり　後漢書には朱草　福草なと
かきてあるん　延喜式には福草（サキクサ）一名又桟（サイ）種（クサ）（サイリユ）とかけり
風土記には紫草とも書く　曾祢好忠集にさき草と
わかなりつるとありしものはまれ姫に萌生する草なれ
三葉四葉とあるは何をそ本といひて此草は秘にも三葉
四葉に萌ゆとも又檜ともいひ日本紀に少彦名命（スクナヒコナノミコト）檜
木の名おほくいへと説おほくありいへは三枝（サイクサ）
発しくありさわとこまいは三枝の花をなりけり酒椿とう
ゆゑに今の文にあるは前川の事なれ但ゆきくされ

三葉とつくる人あるは今の三枝草といへるへきにや葛
宗社天皇内侍所同殿をおそれ給ひて温明殿を七
間にゆつりてあかめられし事は三葉の葉に殿つくり
せりとおほされは三葉の葉合七間の間の字をけし
なり三間の間は或説には三段の段といひなとおもひなれて
屋形をおほくゆくりたまへるよし是根説なりにやなり
けちすのはなのせうりまかり給へる人のはちもくをこ
於蓮華中経十二大劫　観経下品下生
天之雖得生彼花合運於多劫此華罪人在花内時
有三障一九品之諸経更无諸苦經云備妙法丘又云
禅寂
世のうきかたへのやまふになしいみすつく
世すみつきみなかみちいてゝ今はたゝへもそはすしみやわ

ゆらくまゝにしらつゆのみたれてよものまよくは海のしらなみ
いろしけるか
おもふことつたなき人のおほつかなきは身にかえておもひなしけるとなき
そまつせのなかにもしはありなとゝすて我慈のちかひをおもふ
柳はけふしそすき海しらぬわと
玉葉巻に　すこしつゝむのよしは柳のおりやとく結きそめ
人のうへに思ふをつくせられし事のわか心にしもかみつ
ゆりもゆくゆくゆかのみなり
修練は紅に裏染にして　本誓人
いとまなきにまことめる人はみそおそす
山ひとのこゝろなかりけりゆりはてゝあらへかゝ
山海とものこゝにかくて在らいまは極楽をねかやそゆかさ
世政のうきて人の事まかゝすことはしらぬ物のこといつと

ミれし汝家ハ義の代り用ゆるゆへ

うる書れたのしる家からさけく素家ふそわとおもの待のる

らうくきいの家とも志すもハミれし汝家ハ母にすとしきる

いさりなきとしかハれ汝家いおもへわてなきらかきね居いさりに

いなけりの志家より御そつありいちとせれおとらやうきの人

あくへかはのいきのこへ志き汝おもよ乞いちへそおりなる

そゆきるのところに

随 玉篇ニ従果支 說文ニ

長脊 窳 鑫 随窳 後

尺くてあけさせく

まいらう志すはなるになりいてうやすねへりなる

わきにすくまつうう志るさそわしるのあゐおもはすなるの

かのあさまうしうとよれつかにはさいきるつなありとうつしく

伊与あらせてみちうさのうきけさし志けるまし

源氏わきにしてつきあさしかとも紅梅ふいとうちにとけて見えしかばの行なるにや

そこかとあるらんれわきぬこうしゆるさあれいのち

うしらぬすなくしくのみ

かきりあるわきにしらすされいおちと宮にはねく

あるへいのちにたえぬわたしとよみいつきなりけり

信明集 敦慶のミこの女

としいおとこさうかありけり

踏哥監觴 注付未摘花巻ノ

圓融院天元六年正月十四日有男踏哥太政大臣藤原

頼忠公兼家公東宮大夫源雅信桂芳坊右大臣

藤原兼家公藤大納言大納言藤原為光卿神鴻臺権

大納言藤原朝光卿利木左近衛各着上着有踏哥今

度以後男踏哥絶而無之

新儀式に正月十四日男踏哥之
西宮記に延喜十二年正月十四日踏哥奏前に内侍哥
一親王宿所など
太后御記に延長七年正月十四日おとこたうありて
わらうけの藏人四人大にゑひておもしろかりき
持統天皇七年正月丁酉漢人踏哥をたてまつる
是新年の祝詞也

此ことの儀はまつり
源氏院号のあるへし此儀を号するか不審殊に只允
また何に付て此院としし
うつしまやてとうの世行つきせぬ事はあるまじかりにさ
ゆゑにくゑく
水駅 たうかの事に侍りとぞ
承京抄には此事守は勅使ともおこり濱地下向て可然
毎駅給禄にハ雑す海路にハ駅ゆゑさまてきなし
同記に旅宿に付て水駅と云て酒饌事とく
上古有し 見延喜式
一説にかはくま度志する事の枕遠しさるとすゑさ
此ことし水駅の駅家不中用し儀也
今案踏歌宴に飯駅水駅といふ事あり 李部王記

九条右丞相暦記以下にたえたりしかは水駅とてあり
つきは年とくに饗旅せさせられしを別儀
あはれなるかなしいちよまきのなるあひてにのうた
は三年かさしのわさいかひのなれもちのまれ
寿年若白重年老年のことをいひしに白きは
見ことをあかれ但是は儀にいつこと書定記たり
以下踏歌と見ことをし踏歌の記儀に書記にみえたり
かさしのわさ　踏歌の人以綿造花差冠額に号高巾子
そけかいふとひくかたかすき
新儀式云次王以下云叙勧盃綿佐舞是以下
酒三巡後漸調子唱竹河曲入奥
竹河　催馬楽
そけかいめてしれはなすかやつぬつからやかすゑ　庭

これうめかしとはなるてわまはいるふくやさ
しくつく
かうらは萍のすこくそかられさうし
白節ではわこまひくかおう袖とあり
さはいかつえての世をきまこさるの海ことつきれみをかりかう　言吹
一嶋平
おこやきうこと江をししくとりなしさせ中くすふ
のおもしなくきいうしは才ここるかをの波まいのわさか　拍子
つきまうりてまうそてぬ
高巾子
踏歌式　擬冠アイソロ　行儀式
正月十四日
高巾子冠　垂纓　打尉汁囊持襖着位袍
当夜歌頭以下　柏卒麹塵袍　冠下襲　集中洗皆白月花
条入行列右近陣前遅時起御之庭　孫庇南四間　平文以僕子
内蔵寮畢綠綿机立前庭　南第四間　王卿位酒上

簀子布ゟ三間表同座 參及南廊小板敷 賜酒肴於王卿射手不供御酒
踏歌人進南庭西以次奏調子訖入仁壽門列立庭
上踏歌周旋三度後列立御前言吹進此南錦案立
奏祝詞畢右寮持二襞大寮持積候進向計錦數奏
綿鴨曲吹奏此度說着座列立門掃部寮當御階
南邊一許丈立床子為数頭以下踏人以上座相對北
為上仁壽殿西階南立床子為管絃座南廊小板敷
東ミ上敷氈立机為折敷并侍大褰座又省諸司二分
吹管者同着ミ内竪下北面西上為度上侍臣座内藏
畢四人執盤三基立踏人以上座八人執盤一基為
管絃者座并備肴饌次王卿以下ミ度勸盃侍臣
不離座以下行酒三四巡後漸調子唱行歌節起
座列立三尺唱後踏人已上双踏至上上東階内

侍二人相分被綿且踏且還女蹈人二人持綿便退假内侍後 但彈琴
者以下男藏人二人傳取内藏中於庭中被ミ奏
祇家曲退出自北廊戸至後踏介不ミ及曉更東門
座如初前以踏人賜座於庭中西上相對管絃者在横
切北上西面折敷并大褰持座立南折敷上小四折座在山ミ御ミ後
王卿先從簀子壽以以下依召參入著座賜酒饌
此間奏管絃数巡ミ後賜禄有差事了退出并
踏歌子深掛各一領并掌踏掌同色衾一条次物
彈物褁子一領折敷并大褰技持兒縮一丈内藏寮立
高机積綿百長
延喜十三年正月十四日丁巳御記曰此夜有踏歌事
然依風雪及戌剋雪晴亥一剋踏歌人等参入而
大臣進渾前理管絃此時節意子中將親王常陸

太宰親王大納言藤原朝臣権中納言藤原朝臣
参議仲平朝臣定方朝臣等侍簀子敷舞人等
参計衍渠東北列立先奏調子次奏楽衛
進南小鞆三度詞曲纔乃於前立言吹出詞挿頭華荷
綿取奏宿鴨曲次奏此殿此間内蔵寮立臺盤
食作束編掃部施床子奏歌了行着床子親王公
以下度行酒三四巡後召絃更調子催馬楽曲使地
列庭中内侍召人等被綿絹著坐子以下舞
童以上奴袴舞童上階給綿 渾琴二人 男女人付帯緑し 子歌
縫殿曲退出時子一刻自謝口到東楽所曹
司端舞殿弘 司次内侍曹司次承香殿東曹
司篇系 次克明親王盧 昭陽 今 次系入東宮西超 今
彦系入内裏作左近陣下し東庭掃部給 平鋪坐 給酒肴

令奏絃歌三四曲後給禄
歌以給掛舞人行掛下人等人不人等給襖子雅
楽物師等給之絹取入内歌舞人等退出于時卯之
刻

同十七年廿三年同之
童子王記延長七年端午人紫雲纓冠麴塵袍
袍以下韈著深紫帯侍白杖以著立加列前官権脱
釵指靴高巾子著綿四童子二人左舞人外 左右猎児今 阿子故員等
町 葛蒲 其装束如舞人著花加兩鬢房及著緑鞋
左少将行扶進中間綿臺東作了唱左右將二声清江了
擁作以刊綿処唱以一十百千万億等枚小退詞次右権中
将伊衡右弁以右権中将實頼右弄以出北之人系中
宮江藤原次克名舎之元市縁次承香殿 大夫 如御 大饗 次東宮端

一条御前左右大臣皆障共不参宿不故不踏
又云内侍二人相分被綿且拜且還（如蔵人給綿 逆履内侍侍）但弾琴
者六下男蔵人二人侍衣御簾中於庭中後之奏
我家曲退出。

一、踏歌綿事
續日本紀曰天平二年春正月丙戌朔辛巳天皇
御大安殿宴五位以上晩頭移幸皇后宮百官主
典已上陪従踏歌且奏且行｜入宮裏以賜酒食
因令探短籍書以仁義礼智信五字随其字而賜
物得仁者絁也義者絲也礼者綿也智者布也
信者段常布也
今綿を賜ハ此礼のこゝろにや
又すへらく御くらすゑもひさしけれ行て

百春楽　踏歌曲催ニ来由ハ不得し
久すへらく　一返　よろつよに　おくせんまん　二返
くさかせいくさかせいくさかれはれしい　三返
踏歌ハ我家　此度　百春楽十八ツリ　此中曲ゑらふ
わさいのこゑんすへしとの行く
踏歌後宴ニ付て
延喜七年二月廿二日御記曰踏歌掌不奉仕踏歌後宴
ニ付御時堪中将以被左大臣以下給史以下度上云
々永預百両半別如例御賭物臣下賭
秘星　首頭ノ蝶ヲ省筆に納本似之
わらとえらつきしころもそひかさゑせ行向ろ
琵琶袋　百錦或赤地之浮線綾　裏唐綾
笛袋　錦二端

和琴袋　茶地

笙笛袋　大底同様之

並二　胡蝶　春　こてふにもさそはれなまし心ありて
八重山吹をへたてさりせは

かゝやくはかりに見えくせ紋

龍頭鷁首車〻又模唐船躰也　鷁与艦同

うきたる人めく　雅楽寮人〻

ちりぬる夜の名のこりやうに

繞廊紫藤架　夾砌紅藥欄

攀枝摘櫻桃　帯花移杜丹

みなそこのおもしろしと御覧する

柳亦氣力枝先動　池有波文氷盡開

みのはなふおや咲うつる風や池のおもとけさはこ〻妹

水のおもにおや咲みるか春風や山ふきのしなつくさもの

御こにおのへもさいつ御しおもいはくりはくす

おしきいおのつえらすいるまつやし

拾遺
きさところもはかりさつきといつきとのへいにしくさてん

郡國志曰石室山一名石橋山一名室石山晋中朝時有王質者嘗入山伐木至石室有童子数四弾琴而歌質因放斧柯而聴之童以一物与質状如棗核含之不復飢遂復小停亦謂俄頃童子語曰汝来已久何速不去質應声而起柯已爛矣

うきよはみんとこともあらすのえくらしみすうつろう

風ふけはなきさへいつさかひこのやなまはらすかきさ風やかのうん

たと
見えぬ也かきそう行きて地りくやまぬれきとは風やうかうん

一説云石國に信濃に山吹あり若同不知

情婚花云石山よまりてかつらくいろは山吹か

きさすいふけは大やうくあしかすよりのこさゆく

かれなへの山もしかし舟中にいはおみとところにのこらん

不見蓬莱不敢帰 童男丱女舟中老　白氏文集

蓬莱山負鼇背也

ゆくゑもかへ人さへもさますれめへ

續齊諧記曰漢明帝永平十五年中剡縣有劉晨阮肇二人共入天台山採薬迷失道路糧食盡望山頭有一桃樹二人共取食之如覚少健下山得澗水飲之并谷深洗行一里又度一山渓見二女顔容妙絶便喚劉阮姓名如有舊交歡悦問曰劉郎来何晩也因邀過家廳都設男児又有数仙女至女家云来慶女婿各出楽器歌調劉阮就不還女宿言語切義行夫婦之道住十五日求還女曰今来至此皆宿福不招得与仙女交會流俗何可不楽乎遂住半年天氣恒如二三月求去切女曰罪

根不滅使君未至此芳遠劉阮還家亡相識一室
実乃験七世子孫也

わか上とゆふく

皇麞 平調遊声一帖序一帖拍子十六拍遊声
序六ノ破三帖拍子各十六第八第九帖合拍九帖之
第九帖打三度拍子急拍奇弾十一反
南宮譜曰昔善俾此曲者右大臣源常朝臣惣師
安曇縁綴木

万代に来ませよあわしきにゆ波
大ませハ柳桜とこきませて都を春のあやなる
うちてうかきて　盤渉調
あるさしとあらひ給ひわた
春のきにひとゝはいとまにゆりなる
安名尊　僅乃未拍

双調ハ春よつゝさとり調子この春の志きとゆかり
春 双調　夏 黄鐘調　秋 平調　冬 盤渉調　壹越調ハ中央之
なと（たと）をもれとそのけさうことに冲ハ春の志くやあきまろん
かりしらつよ春来ちらひく　黄鐘調之五音ハ律之
あなやさおかりくし　青柳 拍子十二 僅乃未ハ 大生呂序
おとやさはきいとにしらてやとけやうくひすとなは
をや鶯のなくいふそはとけやうかれ乾きや
いつも春のかをこの今ある大と九作と
旅人嬉こゝに釜春
かはかくら寺の名ゝさをあおぬことにおゆひと
宗上か子のなき事に　秘竹よくえくすぎをあり
えしもしらいてあ中の第ひにましあつき
佗さりしのなかはなかくらいつるとみさるくち妙

かしこまり給へつゝ　早速く

おもしろけれはさ海なりけれ

玉箒商に　玉箒の事とゝもありといふくらくし

せく箒の文なとかに乃海つきのうらにかまりし

給ゐかりわしなとおつむし事之

むさしのゆへは花咲あはれはちよまる人名やいかし

けさとくたし花のよまあつまつゝしめてさくまつかは

嵐 しはさかすいのゝ事にて花さゝく葉かまつのあはれをかける

桜もにゆきしをみせしつ本はゆきさのそこはある

えぞらあかれ給ひく　頌

寛平年中宮内にてされつゝやまねしおほかりたり

本朝月令二月云

国史云天平十七年九月平城中宮請僧六百人令読大般

若経季御読経とは春秋内裏にて大般若を講読

せらるゝ事茶にて僧に茶をひくに中宮東宮同し

いのちはひにも給ふ　緋の袈裟に　衣装に

かはりしけるの花のあはれにてくらにいふなれは

小やまふ芥

法会儀式為修参事之延陵頻胡蝶菩薩指供

花二行相分經拝堂上河堂下為仲

金銀事

文武天皇御宇自對馬國始獻白銀

聖武天皇御宇自陸奥國始進黄金九百兩

いかめしきつ畏

もてはやしきもの 平張

かりにあらためなしさら　帷等　帷垣絹に　帷布し
ゆきのひとしきりつきそあいくくさせ行
行書
春ちかくことなど人や志ろくさしに秋もらけいうくらうた
し通女房に紫上の許へ中宮の方にのちまさらそのいとけ
なしきこと給さらし心事し
志ほ井ひとつねてしらすつきくよ給ふ
白細長えさしきに梅のかりちおりとありき行くきうわう
ほうなりし給ふ胡伏映しきて　勝善之縮
此のい袖よすきあへつしら
わうちぬく梅のかつえふ蕾え袖にたきあへつき出しれるい
ここふまひれの花ありてやへ山吹と有ろくさうせは
六拾五 名ありとへいやへ山吹うら名ろ有りてあれう志たまへく
まれうゆらしとましにうとれとはさるやありなむ
やうりかりたてぬやらくらつきとまれ
ゆらしとは上蘭のうし秋好中宮紫上なとれ
いにつきとかい奇れ事え志うきとたまいやすまいかなん
なあめす若早下のうしれ　又陸奥紙にま
思やしなすすれいと笛うれしと
ぬのまかいう給ふら井やあさくもいにもあらしき
いとらしけりなりしきんくとして人まんのつうらもく
と物しまいぬ
紫上ら玉鬘君いりまてのさ海まき人と夢こうちり
さ様はんうにおもふてあきまやうよなら
くりて好さく人れんつてうりたくとすきわいひたくりや
行一新篇

さしきはまことにあつくたうめくさには、はうくちてたりし
ゐあるさへかはんひかたは、おほしけり
内大臣玉鬘(実父)の子と思ひしを、わするると玉鬘のたそ
のさにはおりて、母とは先才はいはさにはなりなりしく
おほゆるとなり
かよひける　文(ヤト)　史記　孝字日　簾
ほとなくいつれも見てはまことにありける
んかしいろしき
迷のやまにくれぬるかたへ、事にまかせて
孔子作、何事不言。論語　長沮　桀溺　丈人　石門　荷
蕢　儀封人　楚狂接輿、孔子とあさけるもすこし
此等は孔子のまよひをあはれみけるのちかよく
なる人は迷のみちをはなれぬを孔子のさとりくさ

孔子の迷はさとり(迷には)あらはれ
律よとも若は若しれさきにて、いたれるのの文しきまね
柏木太政大臣(内)の嫡子　右衛門督　号岩漏中将
うつみのかへしかともありて　思ひをは、柏木の詞也
くらさくのさらにも　此事こそしきりなし
すくしかともかきくあはれなと　切なり
おもはかりなく
あくかれてまかりけるへきにかるしく使和歌の習なりけりすか
中将のまよひのことを　いかにとよそへつきと例の聞しるさん
みちには　男子　或女　しとより
やみもしき　の庭ありしき
かしこくおもひけたるかなしみのすへくいまとも
思ひなきおもひなく

おもしろき秋は
なかなかにいはでいはでぞ思ひける世をうらみしの心なるぞ
世の中のいのちのあるとはおもはいで
はのおやとおやとせうとのうすき縁は何さはおやハ重信
悔のおやし
いかさまにいふも人世かわるとけれおもひしかども人様といふ後人
撰集 いく世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる
わかえてかし米すみ
まよてまきうしとらす行て
四月天氣和且清 緑槐陰合沙堤平 白氏文集十九
そこやら 婀娜 文集
中将のにむかしさまれおもひみてかくてあなたよひよ
夕暮中将参上に ほとゝきすいつ夕郎上にありけん涼

氏めいられぬらし
神のみふるごとにいふなれきくなくかりとそすれ
橘は実さへ花さへ其葉さへ枝は霜ふれどいや常葉の木
五月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする
和泉式部日記に弾正宮うせ給ひて帥宮ねんごろに
それるはなはかりをといひたまへはいかゝ思ふらんとて
かをる香によそふるよりはほとゝぎすきかばやおなじ声やしたると
かぜわけよなるは 風生竹夜窓間臥 月照松時臺上行
ゆくりかにおもひつけさ
不意 日本紀 思ひかけずおもはぬかし 辛未同
かきつはたひとつぬるかさしなきは
藻 うらひるきうちやいさゝ山川のし
かさりたまへにほふかちれ竜すきいうこひとさぬ文ぬかさう

同　海士のあまふねはあまねしわたつうみのおもてをてらすと云　思
うこともあめのいやまさる事も営中に入ぬれどもは
それさらもなほうこひあきらもれどもすり
ゆめのきさなくて
うらとけて詠もよみすぬはわらくきれどりかたにもとかりつ人
かくそり詠らけふゆめわり菓と入れしとりふとゆをこふ
いろよりて詠くのうらはおほとのまつれとおもせさうことく
無ゆひあおほにえ折のおもふいふ文よりそやあそんといはし

並三　営
参ん
こゝの世にくかんなきをはのべはかるそのふかき海るさるみるさかえ
肥後國大夫監事也
かのきむら
人さまれわらに
わらのはは
よろん花
ゆきよね
茜
足寒村心乱
積営のこし
和
帝花
ちらさ氣色れ
ゆるやと次さうに
凡下の惟は三重なる物の義は綾裏は紅文沙の中倉る
しすきつるとは裏まんかくし素麻讀ましれとこ不さ
伊勢物語に此車と女車とそらかけてこくあまめく

あるかの室内よとらて女車にのりなをと車のめぐり
人これはなれまてかいやこ申し以當火女代るか芝木例也
かのしいのりて　會明（ホノノ・アケロノ）
けふあれと　如棠
めでしきやうにて給ぬかりしおちすかのすくらなさくしに
（古止）以五月文雲か諳二三更復夜中夜
又月毎にとの思ひとれいかなるやくもすてていつちゆく妹
よういあとやら　妻　女おやの事に
わかりかれきゆかし
まうかりしき世の中とおけきつくんはおふくなりうらん
つやもいうてふりかなりたるゆかにに　厳ツヤ　又光
くすたまと
續命縷　雲縷　綵縷　穀意なといふりいふ也て

菓玉の注之　宋李回　元和四年斯夜五日五綵
縷之属金門蔵台回端午未養安酒以花結樓臺
棟蝋樣百草花結五綵縷造樓臺木形今菓玉
於之障君之佩霊符小續命仍榮綵縷長（文秀譯句）
沙汰　延喜十三年五月五日丙午余不奉菓玉如常
撤去年九月菓更以菓玉替騰丟御哲前例之
延喜三年五月又日丙申書司立菖蒲瓶余不奉續
命縷如常
又月五日余不菓玉之付すき年以當色菓更と
撤しよく以帳の東以柱り結付く
つきのてゆひ
左近騎射手番之　五月三日左近騎射荒手結五日
右年結四日右近騎射荒手結六日右近騎射真手結之

しほいの花とく　　馬場殿

ひよりのつかふとうしける官人おかりつけし

官人陪従　殿上人まゐりまうしとは容儀のすゝし

すゝこたゆきて下　　下濃

さしかさねのあこめ梅さあふけれまもぬゝりきん

菖蒲重　　四あかくてうら白色こし

あやしこのわか氣れいろしあかりこゝ也　　薄萌木こし

すけさらかきつ待まいりて　　決侍こ

まうとなけらて給ひりけ　かゝとて勝負しけるに

そさらくおそりすきあらひくからまけのらんやうとも

わしう

打毬楽　　納蘇利

よ緑くの勝負れほ乱声すゝしきる相撲武尉

鶏なましけり　延喜十二年亭子院行合し勝負

あつ由みてより競馬行幸より蘇芳菲下狛龍右

奏ことゝゝ文陵王納蘇利常事也打毬楽ての先例の勤

とおりもれ　　進部金人こ

地ほ芳こぶしき　　王ダホキミ

人のくとすんつけ

おましおもとしてなほされ給ふ　　難

紀貫之

わのこ海とすさめぬくさとんかをるこゝさいのけやあ寒やひさつる

たかまよともこまさとさめぬあやめ草かりにも人のこぬるかもし

それこまうやまれなくさこふくさいまりつみこりいこりこの

ワえ　　神楽兵騎

はなれの小かけとすぬかわこ海いつあやめしりわらくさ

わかこ海にとまよあいつあやめ草ないとるてやまうつるらん

またこ海いまりこれしくまち文書通するなし綾宣旨行一本競馬下

よみらん
万葉よりこのかたみなことのはなれり
かずへのうたとくしるせり　住吉物語すく
定頼くりひさめさうてふのそかくしるあと誰ある
ほとくしいおとろしきの人
さみしいのこれみてことをおもいて
明るおもくりなけんへいうしうかれとの又月あれんに
日本紀にはさらさうい絶つしにゆるよそみくしく
くしき事いあらんとて
日本紀三十巻　舎人親王撰
これらは共しくい物語がまた別してい此物語
とけつとめ
おのれのことみさえつるやかいわれおもすやまとぬくいのする

之は佛のいとふつしきんにそとさあふかのりを
佛いは意趣に任して説法し給ふ
方便といふ物ありてさまつたれゆいうつしにたふさき
ひとさけくつくすん
法花の本偈謂其末頌偈の心を
けいこきやうの中たりおいはわれむひみてゆけいおのれ
いわにまりて
開三顕一義也　五時説教い先法花一實ノ道に帰すること
たいとけんあらしとれ爲ことつめん
煩悩即菩提生死即涅槃　妙玄
常に此物語一部の大意作者の心の趣されたところ
方便とは法花をあれ諸教と方等経といふ方本部ものん
諸大乗経於法花未前に諸教演説之法花調於一

縁借ハ一實圓融ゝ自々煩悩即菩提等也
御まいらせ候へハ煩悩となりしけれん心に
よら井行なるさ海にとあされけり
あさまさしく因なすらしこれはみてけり
後すかは佛のなかを　不孝　乗化
古物語ひろ下の物語すくいにて枕言葉なりとは詞あり
又古今集なとゝ此集ともから或にまの物語くまめ
物語すゝきたゝかをあらしおやまらし古今沿也
し御の人　秋人
おやのおきゝへ思ふ間にそゝいけしられ
立身行道揚名於後世以顕父母孝之終也　春徒
すくよりぬ人りいそく人かゝさせし今ま
天使名過實　崔子玉座銘

てんつかしおりすましくも
世俗りしてんをすといつすこかの糸しらかましきん心に
御いてれ出さめき　服君に　古笠木瓜
かの人への給ふをしにおもひくすへしかゝ月の
霊井補し
こゝろの袖ともえぬとしてしるき
六位宿世といひれし　書也
みさ中ね　いらすり中将
女のいくおほりしともえねかねこ所り行
きりしらふ秋とかく
御しらふ夜ハ人を称さぬるし　立所すんえ
ゆかこ行てはよくおかけすゆかすくおゐ世話かる
あ人のこれ人のこゝふ今まうかは

下莞上簟乃安斯寝乃寝乃興乃占我夢
吉夢維何維熊維羆維虺維蛇大人占之
維熊維羆男子之祥　維虺維蛇女子之祥

毛詩小雅
斯干篇